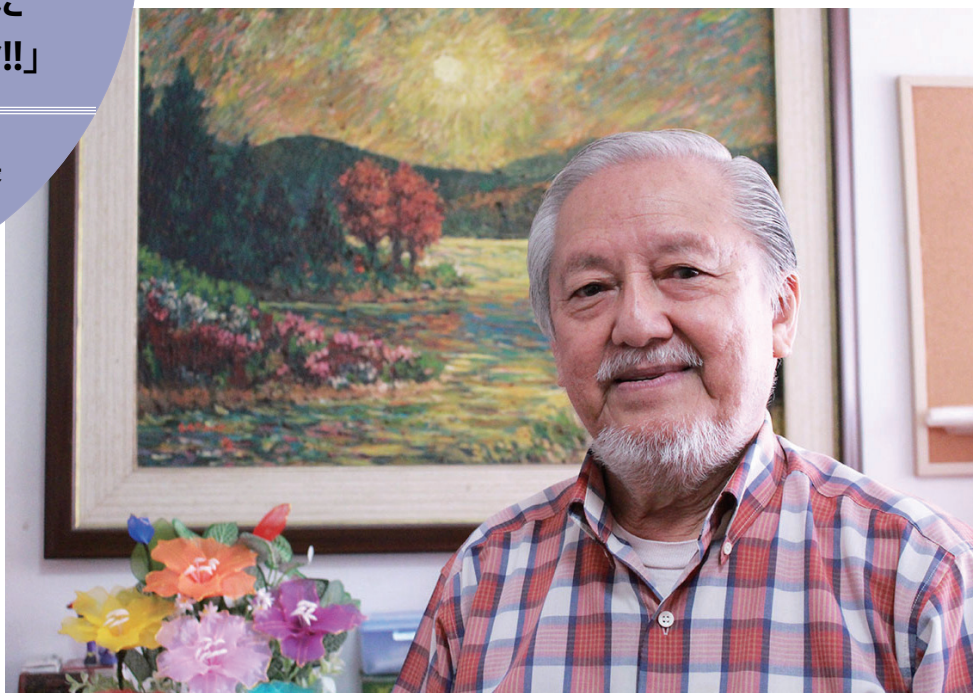




「彼女たちの情熱に 驚かされた。まさに ファンタスティック!!」

マレットファン理事長
ウィタワット教授



マレットファン理事長であるウィタワット教授は長年チュラロンコン大学で社会学の教鞭を執られてきた方。マレットファンスタート時の事務所を提供し、その後も3人を見守り続けてきました。出会いについてお聞きしました。



「お金もないし、コネもない。何にもないけれど、自分たちのやりたいことがある。その夢をどうしても実現したい」。そんな3人がいると聞いて驚いた。それがマレットファンだったんだよ。

私はバンコク最大のスラムであるクロントイ地区を拠点に教育支援をする財団に長年携わってきた。NGOのことはよく知っている。だが、財政や人脈の後ろ盾もなく身銭を切つてまで人のために活動しようとするなんて話はこれまで聞いたことがなかったから驚いたんだ。彼女たちがやろうとしていることを聞いてみると、子どもたちのための図書館を作ったり、子どもたちに楽しく本を読んで聞かせたり、といった活動だと言う。タイではあまり実現されてこなかったけれど大切なことだと感じた。素晴らしいと思ってな、まだ事務所の場所もないというから、それなら私のうちを使えばいいと言ったんだ。

私は教授を引退してから地方暮らしを楽しんでいる。当時は一年の大半を東部のルーイで暮らしていたし、彼らの活動の支えになるならと、空いていた私の書斎を提供した。だからマレットファンのスタートは書斎の机だけ。それでも彼女たちは一生懸命に仕事をした。それまで培った経験を十分いかして、今度は

自分たちの信念で活動する。その後も私は彼女たちの活動を外から見守っていたんだ。情熱を持って道を切り開いていく姿、それはまさにファンタスティックだったよ。

久美は日本でも協力者の輪を広げていった。しばらくして、そろそろ活動を公にしてはどうか、財団法人格を取得してはどうかと私が思い始めた頃、どうやってか知らないが、財団の設立に必要な役員を各界から集めてきた。偶然なことに、その一人はチュラロンコン大学の私の教え子でな。嬉しい再会だったよ。それから設立資金。彼女たちの熱意を知り、決して多くはない自分の貯金を割いて寄付してくれた人がいた。そうした支えがあってマレットファンは見事に財団法人(ムラニティ)になったんだ。先日、マレットファンはムラニティとなって5歳の誕生日を迎えたよ。

私の書斎も手狭になってきたようなので、もっと大きな場所に事務所を移したらどうだ、もっと活動を大きくしたらどうだ、と言ったんだ。すると、また人が現れた。空いているオフィスを使ってくれという人だ。じつに不思議なことだが、マレットファンの周りには自ずと手を差し伸べてくれる人がいる。そうしてマレットファンは夢を実現していった。本当に驚かされる。これからもそうやってマレットファンは夢を実現していこうと思っているよ。

ウィタワット教授のマレットファン(夢のたね)は? What's your "Maletfan"?

1962年、高校生の時にアメリカに留学した。留学先の高校の方針は「academic, work, service」。勉強に加えて働くことが推奨され、料理も掃除も洗濯も生活のことは何でも自分たちでやり、地域への貢献活動もした。それが今の自分を形成しているし、素晴らしい経験だった。タイでは学力ばかりが目目される。だが優れた人間とは、知性があり、手を使った仕事をし、他人を助けられる人間だ。そんな若者を育てるために、私が学んだ高校のような学校をタイに作りたい。